

鎌倉時代の武家社会における誕生儀礼と社会秩序

五 福伊八郎

〔抄 録〕

武家社会の成立において、儀礼や年中行事の整備という面から、社会秩序の形成・維持が図られたという想定ができる。儀礼や年中行事は、社会に浸透した思想に含まれる特定の觀念に意義付けられて秩序として機能し、それまでの公家社会が儀礼や年中行事を秩序として維持されてきたためである。他方、秩序に関する従来の研究は、制度的な面からの検討、すなわち法の整備を中心とした検討が行われてきたが、法整備以前の秩序の検討に欠落が生じ得るという課題があった。

そこで、本稿では儀礼のうちでも人生最初の通過儀礼であり、その人物の個性の描写が期待できる誕生儀礼に注目し、武家社会にとつて身近な武具・武芸との関わりを議論する。そして、『吾妻鏡』を検討資料とし、儀礼に関連づけられた觀念が身近な事物（弓、劍・刀、馬）を通し、秩序として円滑に導入しようとする意図があったことを明らかにする。

キーワード 武家社会、誕生儀礼、武具、武芸、社会秩序

はじめに

公家社会から武家社会への移行期に当たる鎌倉時代は、武家に社会を統御する秩序が求められた。秩序は法のように制度的なものだけでなく、儀礼・年中行事のように慣習的なものも含まれ、法が緩んだ公家社会は長らく儀礼や年中行事に従って統御されてきた。それは儀礼

や年中行事の構成要素が、社会に浸透した思想に含まれる一定の觀念に意義づけられ、秩序として機能するためと考えられる。

武家社会における秩序の整備については、従来は制度的な面を中心に論じられてきたと言えるが、実際には法という制度は急速に整備されるわけではない。まずは、武家社会でも相応な儀礼・年中行事の形成が見られ、秩序の維持が図られたと考えられる。そこで、本稿では

儀礼・年中行事を特徴づける構成要素を考察することにより、秩序の形成と変遷について検討することを目的とした。

社会的背景に伴う儀礼・年中行事の変化・再編を探るための検討資料には『吾妻鏡』を取り上げた。編纂物である『吾妻鏡』については、原資料の検討や編纂姿勢の分析を行いながら鎌倉幕府を研究するという、八代国治氏が根付かせた研究方法を、従来手薄であった生活面、特に儀礼について摘要した。

また、儀礼・年中行事に関しては、人生最初の通過儀礼であり、その人物の個性の描写が期待できる誕生儀礼に注目し、公家社会については『皇室制度史料 儀制 誕生』、室町時代については『御産所日記』、『成氏年中行事』などの故実書を参照し、鎌倉時代を補完するという姿勢で検討を行った。

そして、儀礼の構成要素への観念の関連付けには、武家社会にとつて身近な武具・武芸を通じて秩序の円滑な導入が意図されたと想定し、武具・武芸の中では、第一に弓、第二に剣・刀、第三に馬を取り上げた。また、これらに意義付けられる観念は、公家社会の実務的思想であつた儒教を中心に考察した。儒教との関連が見出しにくい場合は、俗信や伝説などから予想される観念を上げた。そして儒教思想に含まれる観念として、「礼」（特に、儒教が求める理想の道德）、「忠」「信」及び「序列」を想定した。その際、古代社会で礼を論じた大日向克己氏の『古代国家と年中行事』、室町時代の故実書を研究した二本謙一氏の『中世武家儀礼の研究』などの考え方を参考にし、鎌倉時代における武具・武芸と観念との意義づけを考察した。

以上のように本稿は、鎌倉時代の武家社会において、身近な儀礼に社会秩序の一端を担わせたことを検討した。

第一章 弓に関する誕生儀礼

第一節 公家社会の誕生儀礼における鳴弦

弓に関する誕生儀礼には鳴弦があげられるが、武家の儀礼を検討する基準として、まず公家の儀礼を確認しておく。このうち天皇家の誕生儀礼については『皇室制度史料 儀制 誕生』¹⁾を参考として、平安時代から室町時代初期まで、鳴弦（湯殿儀）の特徴を整理した。なお、一般的に鳴弦は「弓を持つて弦を打ち鳴らし、邪気を払う呪術である」と説明される。

・皇子女が誕生すると、湯殿儀と呼ばれる浴湯が、産湯とは別に御産所で行われた。湯殿儀は平安後期・鎌倉前期に盛行するが、鎌倉後期以降、簡略化の傾向が見られる。

・七夜より後にも、浴湯の儀式が一定期間行われている事例がある。しかし、「内々」の儀と呼ばれ、七夜以前の湯殿儀とは区別して考えられている。

・湯殿儀の浴湯に合わせて読書鳴弦儀が行われた。

・読書役人は紀伝道二名・明経道一名の計三名を基本とした。

・鳴弦役人は五位十人・六位十人の計二十人を通例とした。しかし、鎌倉後期以降、人員は減少した。

・読書は男児に限られ、女児には行われなかった。読書に用いられた書物は、『周易』・『尚書』・『毛詩』・『礼記』・『春秋左氏伝』・『孝

經』『論語』『千字文』『史記』『漢書』『後漢書』などの漢籍で、選訳は読書役人に任された。

これらについて、代表的な事例をあげて変遷を把握し、武家社会成立の際の参照とする。まず、確認できる湯殿儀の初例は、延長元年（九二三）の朱雀天皇誕生のときであるが、読書のみで鳴弦は行われていない。続いて延長四年（九二六）、村上天皇誕生のときに行われるが、読書・鳴弦ともない。そして、読書鳴弦儀を伴う湯殿儀は、天曆四年（九五〇）の冷泉天皇誕生に始まる。

内々の儀については、元永二年（一一七九）の崇徳天皇のときから確認できる。その後、記述があいまいなものも含め六例が確認できるが、鎌倉時代後半に集中している。

鳴弦役人の数は、天曆四年の冷泉天皇のときに人数が定まる。応保元年（一一六一）の高倉天皇のときに著しく少なくなる例もあるが、十四世紀初まではほぼ所定人数が確保できている。しかし、元享元年（一二三二）の豊仁親王の頃から減員が目立ち始め、回復できなくなる。

読書の書籍は当初、上述の書が均等に読まれていたが、次第に『孝経』の比重が高まる。そして、康治二年（一一四三）の二条天皇誕生の際には、「読書は御注孝経が吉例」と女院（藤原懿子）からの仰せがあり、『孝経』（特に天子章）が優先されていたことを示す。

ところで、公家社会では摂関家でも読書鳴弦儀を伴った湯殿儀が行われたので、簡単に触れておく。摂関家の湯殿儀及びそれに伴う読書鳴弦儀は、天皇家に準ずるものであったといえる。その開始時期は天

皇家より約五十年遅い寛弘年間（一〇〇〇年頃）とみられ、寛弘四年（二〇〇七）の藤原嬉子（藤原道長女）の誕生が早い時期と考えられる^②。十一世紀半ば頃には大体固定化しているようで、康平五年（一一〇六二）の藤原師通の誕生では『孝経』を読み、鳴弦人は五位・六位各六人であった^③。さらに、院政期の仁安二年（一一六七）の九条良通の誕生でも『孝経』が読まれ、鳴弦人が五位四人・六位二人、承安三年の九条任子の誕生では鳴弦人が五位五人・六位一人であった^{④⑤}。

摂関家では、読書は天皇家と同じく『孝経』が優先されたようであるが、鳴弦は役人数が天皇家より少なく、また、七夜より後の浴湯もなかったようである。これらの点で、主君と家臣の差異が設けられていたと考えられる。このように、公家社会においては天皇家、摂関家で読書鳴弦儀を伴う湯殿儀が、誕生儀礼の一つの構成要素として行われるようになっていた。

第二節 弓の示す観念

ここで、読書鳴弦儀の意義を検討しておく。まず読書には、上述のように過去の聖王について語る史書や儒教の典籍（特に『孝経』）が選ばれてきた。その理由については、「めでたい一節を読み上げる」という見方が長く認められており、誕生が書物の内容を理解できないことを考慮すると、一応納得できる。しかし、二条天皇誕生の際の見解には別の意義があると考えられ、読書の内容が誕生に将来実現してもらいたいこと、即ち誕生への期待と考える方が自然に感じられる。特に男児にのみ行われ、『孝経』が重視されるようになるのは、誕生

が読書の内容にあるような聖王になることを祈願・期待するのが、読書の意味だと考えられる。

次に鳴弦は、邪気を払う呪術であると古くから信じられていたようで、そのため誕生儀礼にも取り入れられたと考えることはできる。しかし、邪気を払う弓の武威（辟邪の鳴弦）は礼の觀念に従うもので、そのために誕生儀礼に取り入れられたと考えるほうが適切と思われる。

これは、思想的な面で儒教の典籍である『礼記』射義に典拠が求められる。特に、『平家物語』御産の巻の事では、安徳天皇誕生の際に平重盛が桑の弓・蓬の矢を射るしぐさをする場面があるが、これは『礼記』射義に依拠した記載である。『山槐記』によると、実際にはそうした記録はないが、鳴弦と『礼記』射義の関連が浸透していたことを示すものである。

また、『礼記』射義には、射は天子や諸侯がたしなむべき武芸であり、天子が祭礼を行う際は、射を心得たものしか参加できないとしている。つまり射は礼の基本であり、その品格によって政治を行うことの可否が決まると言っている。ここで『礼記』が示す礼とは、理想的な政治姿勢や道徳という広義の礼であり、のちに形成された仁義礼智忠信孝という倫理観の中の狭義の礼ではない。そして『礼記』射義の言葉は、射礼が天皇を中心とした礼の秩序を形成したことに反映される。

射礼は当初、親王以下初位以上の全官人が行う大射というものであり、変遷を経て中世まで続いた。平安前期には、親王以下五位以上から選出された能射人と六衛府等が甲乙二組に分かれ、それぞれの射席

（豊楽殿前と、観徳堂・明義堂間）で木工寮や兵部省の差配の下、基本的に上位者から順に射を行い、天皇が観覧するものである。来朝している蕃客（主に新羅と渤海）も五位の次にその国の弓矢で射を行った。この儀式は嵯峨朝に確定し、弘仁六年（八一五）以後、豊楽殿使用が恒例化するが、奈良朝以来ほぼ同じ儀式構造であり、その意味は天皇に対する全官人の服属奉仕と弓矢による守衛、そして諸蕃の従属という、天皇を中心とした礼的秩序を表現する儀式であった^⑨。

射礼は九世紀中葉から変質し、天皇と貴族官人層との礼的秩序は賭弓と弓場始に再構築されるが、天皇を中心とする礼的秩序が、射によって形成されたことは変わらない。

射が礼の秩序を形成したと同時に、射の道具である弓は礼の象徴とみなされたと解釈できる。そして、鳴弦は射を模して礼の觀念を表現するものと考えられ、誕生儀礼における鳴弦は、誕生児が礼に従う武威を備えた聖王に育つことを願う儀礼と考えることができる。

このように、読書は孝（広義の意味では礼に含まれる）、鳴弦は武に関する礼の觀念を空間に満たす行為であるとみると、セットとしての読書鳴弦儀は、文武両面から帝王教育を施す儀礼とみなすことができる。女兒には読書がないが、鳴弦により礼の觀念が満たされた空間に置かれることは男児と同じと考えられる。つまり、武威の礼で守護されるという立場で、礼の觀念が刷り込まれたと考えられる。

ところで、文献資料における鳴弦の初出は『日本書紀』雄略紀で、吉備尾代が弦を鳴らして逃げる蝦夷を打ち殺した記事とすることが多いが、これは鳴弦の呪術的効果によるというよりは、単に弦の張り方

を調整して中りがよくなったと見るほうが自然と思われる。また『舒明紀』においては、上毛野形名の妻が弓の弦を鳴らして蝦夷を追い払う記事もあるが、こちらは弦の音を聞かせて、戦力の存在を敵に示しているのとみるのが妥当と思われる。

いずれも辟邪の鳴弦とは言えないと思われるが、弓の威力を認識させるもので、鳴弦が辟邪の意味も持つようになる背景を示す記述である。そして様式が整えられることによって、鳴弦は武威に裏付けられた礼の観念を示す儀礼になったと考えることができる。

第三節 室町時代の武家の、誕生儀礼における鳴弦（将軍と鎌倉公方）

さて、順序が逆転するが、武家の故実書が整備され、誕生時の鳴弦についても詳しい手順が示されている室町時代について先に見ておく。このうち、将軍家に関する『御産所日記』（義勝誕生の例）と鎌倉公方に関する『成氏年中行事』¹³について内容を整理する。

『御産所日記』では、湯殿儀について湯殿始と細かい作法は記されているが、初日以外のことは書かれておらず、それぞれの期日を知ることができない。一方、鳴弦については期日による作法の違いが書かれている。まず、生まれた時には褓目を放ち、鳴弦を行う。役人は褓目二人、鳴弦一人である。続いて、七日間昼夜通しての鳴弦を三人で行う。このときは褓目役二人が鳴弦役を引き受けているようである。

これは「七夜座サマサズノ鳴弦」と言われた。その後は、生後三十日になるまで毎日鳴弦が行われた。その際の役人は、ほぼ同じメンバーが伺候しているが、夜は退出する者もあり、鳴弦は常時行っていたわ

けではないようである。

次に『成氏年中行事』を見ると、『御産所日記』とほぼ同じ内容と、『御産所日記』より明確な内容がある。そのうち鳴弦は、誕生が近づいたら妊婦の声が聞こえることに隣の部屋で弦を打つものとした。誕生したら、男児は褓目を三回、女児は二回射るとした。つまり、鳴弦は褓目より前から始めており、誕生児の性別を褓目の数で知らせる。湯殿儀は七夜祝で一応の区切りとなるが、その後も続けられる。読書はなく、鳴弦は七夜までは役人が決まっている。そして、七夜のあと三十日までは、誰か伺候している者が浴湯のときに鳴弦を行った。

これを公家の湯殿儀と比べると、読書はなく鳴弦だけが行われている。誕生時には褓目を放ち、その前から鳴弦を始めている。役人数も少なく、これらの点は武家の作法といえることができる。生後一週間の鳴弦も、期間は天皇家と同じであるが、形態は大きく異なっている。これに対し、その後三十日までの鳴弦は、天皇家における内々の儀と言われた鳴弦に近いものと考えられ、私的な儀式が公的なものに格上げされたとみることができる。

第四節 『吾妻鏡』に見られる、誕生儀礼における鳴弦

『吾妻鏡』の出産記事のうち、記述の詳しい七例を選び検討した。また、補足で三例をあげ、適宜検討対象とした。そして、編纂者の意図を考慮しつつ鳴弦の形式や作法の検討を行った。

（一）頼家誕生…養和二年（一一八二）七月十二日条く寿永元年（一一八二）十月十二日条。

〔二〕 実朝誕生…建久三年（一一九二）七月四日条…十二月五日条。

〔三〕 一条実雅室の出産…承久三年（一二二二）十二月三日条…同四年二月十二日条。

〔四〕 北条義時室の出産…貞応元年（一二二二）十一月二十五日条…十二月十三日条。

〔五〕 九条頼経・二棟御方の出産（頼嗣）…延応元年（一二三九）八月二十二日条…十月二十一日条。

〔六〕 北条時頼室の出産（時宗）…建長二年（一二五〇）十二月五日条…同三年十月二十一日条。

〔七〕 宗尊親王御息所の出産…文永二年（一二六五）六月十三日条…九月二十一日条。

〔八〕 九条頼経御台所の出産…天福二年（一二三四）七月二十六日条…二十七日条。

〔九〕 北条時頼室の出産（宗政）…建長五年（一二五三）正月二十八日条。

〔十〕 北条時頼室の出産…建長六年（一二五四）十月六日条。

頼家誕生（一）は、後白河上皇の院政下で源平の争いが拡大し、木曾義仲の追討が始まった時期に当たる。頼朝は武衛と記され、従五位上という低い身分である。鳴弦は臨産時にのみ三人で行っている。また引目役がいるが、室町時代の『産所之記』¹⁴を参照すると、鳴弦役より重要な役である。

産養は三夜…九夜にあるが、読書鳴弦儀はない。社会情勢的には西国の平家は健在で、頼朝は関東制圧中のため、読書を奉仕する余裕も

役人もなかったことが考えられる。しかし、鎌倉時代武家社会の鳴弦は、読書鳴弦儀のように形式的な儀礼ではなく、身近で分かり易いものであり、武威を背景とした礼で、争乱を治める秩序を望むものと考ええるのが自然である。

ところで、このような鳴弦形式は、室町時代の武家の鳴弦と似ている面が多い。出産後の鳴弦こそないが、引目役があり、鳴弦役人が少なく、臨産時に鳴弦を行っているなどが、武家の鳴弦の特徴を示している。臨産時の鳴弦は时期的に早いとも感じられるが、鎌倉時代初期成立の『北野天神絵巻』¹⁵に描かれており、不自然ではなさそうである。なお、『北野天神絵巻』に描かれる出産は対象とする階層が不明であるが、かなり富裕に見えるので地方武士団の長かと考えられる。そうであれば、身分の低い頼朝が鳴弦を行っても不思議はない。

個別の役人を見ると、御産奉行は京の文化に通じる梶原景時が務め、頼家の後見を託されている。景時は、人が嫌う命令も忠実にこなし、官僚的にも優れており、頼朝の信頼を得ていたことによる。そして頼家が武門の教育を受けた反面、長じて京風の感覚を持ったのは景時の影響と思われる。そのため、安達景盛という有力な後見を失う一因になったと考えられる。また、將軍となった頼家は性急な変革を行い、現状維持を望む宿老たちに親裁を停止されるが、景時は、代わりに布かれた合議制のメンバーに加わりながらも、頼家と調整を続けた。しかし、両者ともお互いに見限り、景時は他の宿老から怨みで失脚し、頼家も幽閉・殺害されることとなる。

ところで、『吾妻鏡』は金沢氏を中心となつて編纂を行ったという

説が有力であるが、五味文彦氏によると、その原資料や編纂意図にはいくつかの類型があるという。原資料には『明月記』など京都の資料が一部含まれるが、三善氏、二階堂氏、大江氏など公事奉行に関わる家の文書、権利関係など由緒として提出された記録、宣旨など朝廷から幕府に届いた文書類に分けられるとする。また、編纂意図も当時の社会情勢を反映しながら、北条得宗家とそれを支えた公事奉行に関わる家の顕彰、武家を構成する各々の家の正当性の主張があげられるとする。

これらを考慮すると、東国の有力御家人の総意による統制が望まれた源氏将軍期は、頼家、実朝の失政に加担した勢力を批判的に記述し、結果的に北条氏を正当化するのが常套手段であったと考えられる。しかし、景時の勲功は多く、編纂で削除できなかったと思われる。即ち、景時が頼家の御座奉行を務めたことは事実の可能性が高く、頼家誕生記事は信頼性が高い。

引目役は、東国で強大な軍勢力を誇る上総介広常が務めたが、当時の広常は頼朝から軍勢力を頼られており、引目役には適任である。この点から見ても、頼家誕生の記事は信頼できそうである。但し、広常はこのあと頼朝に誅殺され、殺害を実行した梶原景時は悪評を得ている。

鳴弦役では、師岡重常が義朝の代から源氏に仕えて頼朝の信頼を得ていたが、源平合戦の際に頼朝に無断で任官し、礼を欠いた行為として不興を買っている¹⁶。また、姪が義経の嫁という微妙な立場にあった¹⁷が、奥州合戦で信頼は回復している¹⁸。大庭景義は弟の景親に反して頼

朝の挙兵に参加し、奥州合戦では勅許の無い出陣を決意させるなど信頼は厚かった。一時は冤罪で鎌倉を追放されたが、頼朝上洛時に許された。多々良貞義は詳細不明である。

鳴弦役も勇士か信頼の厚い人物が務めるが、大庭景義以外は奥州合戦以降の記録が見られず、大庭氏も衰退した。後世に家を顕彰する者がいない記事であり、この点でも頼家誕生は創作ではなく、実際の記録と思われる。また、頼家の後見になるべき人物が次々と失脚や衰退をしたため、最後に残った景時との決別が北条氏の台頭を許し、暗殺を運命づける要因となったと言える。

実朝誕生(二)では、頼朝は正二位征夷大將軍と高位になっている。また、平家・奥州藤原氏ともに滅んで戦乱は治まり、対立していた後白河法皇も崩御して政治的にも安定している。そのため、頼家との違いが予想されるが、実際はほとんど差がない。これを、武家の鳴弦の特徴と考えれば、差がないのは不思議ではない。そこで、各役人について見ていくこととする。

鳴弦の記載は頼家とほぼ同じで、出産日に二人の奉仕がある。引目役は和田義盛で、実朝の後見を期待されている。ただ、義盛は侍所別当を一時梶原景時に奪われ、厳しい糾弾で御家人間の争いを激化させた。結果的に、和田一族は北条氏に殲滅され、頼家の場合と同様の状況となる。状況の類似は作為を感じさせるが、編纂で名前までは入替えないと考えれば、実朝誕生記事も信頼してよい。また、後見の壮絶な滅亡は、実朝を凄絶な最期に導く一因と考えられる。

鳴弦役では、平山季重が源平合戦で武勇を誇ったが、やはり無断の

任官で頼朝の怒りを買っている。¹⁹その後、奥州合戦参加と、頼朝の東大寺供養の随行で許されている。²¹上野光範は不詳である。鳴弦役が礼を欠く状況は頼家の場合と同様で、実朝支持者の減少を予想させる。実際、実朝の武芸を避ける姿勢は御家人たちから批判され、支持者は失われる。

産養は七夜まで行われているが、読書鳴弦儀は行われていない。將軍家に天皇家の儀礼が認められず、また、武家には不要とみなされたためと思われる。これより、実朝誕生時の鳴弦も、武威により礼の秩序を示すものであったと思われる。

さらに実朝は、十五歳に『御注孝經』で読書始を行っている。読書始で書物の内容が理解できる年齢に行なわれており、公家でもこれくらいの年齢で行っている。皇子に対する読書鳴弦儀が形式的儀礼であったのに対し、將軍には適宜実用的な儀礼が行われたと考えられる。

一条実雅の女子誕生〔三〕は、実雅が頼朝の義理の甥にあたり、北条義時の娘を妻とし、九条頼經の補佐役でもあったため、記載が詳しいと思われる。頼經の関東下向に伴った僧・医師・陰陽師らが出産に奉仕している。誕児が女子でもあり、読書鳴弦儀はない。また、出産時の鳴弦もない。因みに実雅は、後に伊賀光宗と伊賀の方が北条泰時打倒を計り、頼經の代わりに將軍に擁立しようとした人物で、そのため京都へ送還され、越前配流となっている。

北条義時の男子誕生〔四〕は、一条実雅の例〔三〕とほぼ同内容である。この場合も鳴弦の記載はなく、鎌倉幕府では、出産時の鳴弦は將軍家にしか行われなかったであろう。

九条頼朝の誕生〔五〕では、頼家・実朝の例と同様、出産時の鳴弦は行われているが、読書鳴弦儀は行われなかった。これに先立ち、文暦元年（一二三四）に頼經の最初の妻である竹御所の出産記事〔八〕がある。出産時の鳴弦役人を十人も揃えており、摂関家の鳴弦を模そうとする意図が感じられる。残念ながら死産で竹御所も死去したため、その後の誕生儀礼はない。

北条時宗誕生〔六〕では、加持祈禱、仏像供養などの記載は多いが、鳴弦は行われていない。

宗尊親王御息所の姫宮出産〔七〕でも、〔六〕と同様、加持祈禱、仏像供養などの記載は多いが、鳴弦の記載はない。將軍家で鳴弦がないのは異例であるが、宗尊が京都に送還される前年であり、武家の協力が得られなかったためと思われる。

ここで、『吾妻鏡』に見られる誕生儀礼の鳴弦をまとめると、以下のことが言える。まず、記事の信頼性は頼家と実朝の誕生についてしか論述しなかったが、他の八例も人物像と状況から見る限り、大きな作為はなさそうである。そして、鎌倉時代の武家の鳴弦は臨産時に行うのが一般的で、頼家、実朝、頼朝の誕生と竹御所の出産の四例は、文章に明記されたものとしては早い時期と思われる。つまり、臨産時の鳴弦は鎌倉時代に武家社会に広まり始めたと思われるのが妥当と感じられ、その対象は鎌倉では將軍の子に限られたようである。その後、頼經の鎌倉下向に際して規模拡大が見られ、摂家將軍として公家の礼の秩序へ復帰する意図が感じられる。さらに、宗尊親王の頃には鳴弦は一旦なくなり、將軍家の誕生儀礼の変容が窺える。

また、引目は「戦いの始まりを通告する」という礼の秩序を、出産時の儀式として取り入れたものと考えられ、鎌倉時代に誕生した武家的な儀礼と言える。但し、摂家將軍以降は途切れ、公家儀礼への回帰が感じられる。その後、鎌倉時代後期の武家社会の鳴弦の変容はわからないが、室町時代には『御産所日記』や『成氏年中行事』に示すように、武家社会で発生した臨産時の鳴弦と引目を公家の湯殿儀における鳴弦を組み合わせた様式に整備される。

以上のように、鎌倉では將軍を中心とした礼の秩序が、弓を使った儀礼である鳴弦に見られることが確認された。その形態は源氏將軍の時期は戦中での礼の転用、摂家將軍以降は公家儀礼への回帰と言えるのであり、徐々に公武折衷様式に変化したと言えるのである。

さらに議論を展開すると、礼の秩序で問題解決を図ることに限界が生じ、『御成敗式目』という法による秩序に依存するようになったことが、礼の秩序を象徴する鳴弦に影響を与えたと考えられる。本来は、儀礼と法は相補的にバランスがとれていることが望ましいと思われるが、法という一方の秩序が強くなった時、儀礼が不安定な変遷を始めたと考えられる。

第二章 剣・刀に関する誕生儀礼

第一節 平安時代の公家の、誕生儀礼における剣・刀の賜与

『御堂関白記』寛弘五年（一〇〇八）九月十一日条で、敦成親王誕生に「従内賜御剣」と記載がある。この時期は皇子出産の旨を奏すると、宮中から近衛の將の勅使が産婦の里第に派遣され、慶祝の御剣一

ふりを新誕の皇子に賜わる例となっていたが、これはその一例である。また、長和二年（一〇一三）七月六日の禎子内親王誕生にも「従大内以朝經朝臣給御剣」と記載され、皇女も剣を賜ったことが分かる。但し、従来皇女に献上されたのは袴で、『栄花物語』巻第廿八、わかみづの、後一条皇女章子内親王誕生記事で、禎子内親王が初例と分かる。

とはいえ、皇子と皇女の賜剣は全く同じではない。賜剣の使者となる近衛の將は、皇子には中将級であったが、皇女には少將級と多少下級であった。賜剣の時期も皇子は誕生第一日目であるが、皇女は禎子内親王が三日後、章子内親王が六日目など、皇子より遅れる例であった。

一方、寛弘二年（一〇〇五）八月二十日の、道長の六男誕生に賜剣の記載はなく、摂関家ではなかったようである。ただ、万寿二年（一〇二五）正月十日、頼通に男児誕生の際には、

いと平らかに大をのこそ生れ給へりける。殿聞しめすに、あさましきまでおぼされて、御剣など遣す程ぞめでたきや。

と記され、貴族層にも浸透し始めていたとの推察がある。しかしながら日記等には所見がないとのことであり、臣下の家では行われなかったと見る方が、自然と考えられる。⁽²³⁾

第二節 剣・刀の示す観念

ここで、剣・刀に関する観念について検討する。古代日本においては、天皇から遣唐大使や將軍に授ける節刀というものがあつた。天皇

の最高指揮権を象徴する刀で、『令義解』軍防令節刀条に、「凡そ節は髦牛の尾を以て為る。――中略――今刀剣を以て代う。故に節刀と曰う」とある。つまり、節刀とは節に代わる刀の意であり、戦争が決定されると天皇は將軍に節刀を賜与して作戰指導・生殺与奪の全権を委任し、戦争後、將軍から天皇に返還されたものである。当然、受任者は委任者に忠誠を誓う。

また節は、『宋書』百官志によると前漢から見られる語であり、『漢書』李広蘇建伝には髦牛の尾の旗とある。さらに『礼記』王政を見ると、前漢より前は弓矢（及び鉄鉞）が節に相当しており、刀剣は節を通じて儒教と関連することがわかる。

誕生儀礼においては、天皇から皇子への賜剣は子の信頼であり、自分の子であることの認知を意味する。九世紀に見られた幼少親王や元服前後の親王が天皇から帶剣を賜与される九世紀の慣行が、誕生直後になったのが皇子誕生における御剣賜与になったと考えられている。²⁴

後に、刀は幼児の御護刀としての献上も広まった。魔除けの道具として幼児を物の怪などから守護する意味で、忠節の意を示すと捉えることができる。整理すると、剣は信頼と忠節の象徴であり、刀もこれに準ずる扱いができる。つまり、剣・刀は信頼と忠節の觀念を、秩序として植付けたと考えられる。

第三節 室町時代の武家の、誕生儀礼における剣・刀の授受

剣・刀の授受は、『成氏年中行事』には記述がないので、『御産所日記』について整理する。

まず、誕生日初夜には若君の引出物に銀劍一腰があり、天皇家で賜与される御剣に相当するものと考えられる。翌日には御剣（守刀）が与えられており、慣例化していたことが窺える。続いて、加持僧・陰陽師・医師に太刀が与えられるが、男児の場合は医師に馬が加わる。産養いは初夜、三夜は將軍、五夜、七夜、又七夜、後七夜は幕府の重臣が担当するが、このとき家臣から將軍・若君に太刀が進上される。特に五夜を担当した管領は、將軍から太刀が与えられている。また、加持や祈禱は誕生後も続けられるが、彼らにも折々に太刀の下賜がある。

このように、室町時代の將軍家では、摂関家にも認められなかった御剣賜与が行われ、守刀の賜与も行われた点が大きな変化である。また、信頼・忠誠の意義を持つ太刀の進上はその回数や進上者数が大きく増えており、武家の性格を表すものと考えられる。さらに、加持祈禱などの奉仕者への太刀の下賜は、給祿であるとともに神仏への感謝であるとも考えられる。全般的にも、太刀の授受が公家社会に比べて圧倒的に増えており、武家的社会の特徴といえる。

第四節 『吾妻鏡』に見られる、誕生儀礼における刀剣の授受

頼家誕生（一）においては、將軍から誕生児への賜剣はなく、有力御家人七人（宇都宮朝綱、畠山重忠、土屋義清、和田義盛、梶原景時、同景季、横山時兼）が御護刀を献上し、頼家に忠誠を示している。これは、賜剣の代わりの武家的儀礼とみられる。但し、和田義盛、梶原親子と宇都宮朝綱弟の八田知家は、のちに頼家の親裁を停止して幕政

運営の合議制メンバーとなり、頼家への忠誠を翻している。

その後、頼家側近の梶原景時は合議制メンバーと頼家の板挟みとなり、早々と北条氏に滅ぼされる。畠山重忠、和田義盛も北条氏に滅ぼされ、横山時兼、土屋義清も義盛と共に戦死する。これらから、不忠者たちの破滅に見せて有力御家人を排除する北条氏の意図が窺える。

七夜儀では、千葉一族が剣など武具一式を進上して忠節を強く示し、源氏三代期は活躍している。千葉氏本流は宝治合戦で滅ぶが、残った支流が家の由緒を残した記事と考えられる。

このように、誕生時には多くの有力御家人が刀によって頼家に忠節を尽くす態度を示したが、のちに頼家が御家人の総意を容れなくなり、刀による忠誠が反故にされてしまったと言える。

次に、実朝誕生〔二〕においては、誕生当日に有力御家人六人（江間四郎（北条義時）、三浦介義澄、佐原義連、野三刑部承（小野）成綱、藤九郎（安達）盛長、下妻四郎弘幹）が御護刀を献上している。別の有力御家人（大江広元、小山朝政、千葉常胤など）も馬や剣を献上している。また、七夜儀にも、御家人たちが馬と剣を頼朝と実朝に献上している。

誕生二ヶ月後の御行始には安達盛長が剣を献上している。盛長は頼朝配流期から信任が厚く、子孫も幕府に忠節を尽くしている。また、北条時政は五十日百日儀に、剣を献上している。

その約一ヶ月後には、永福寺御堂供養で鎌倉に参上した多数の御家人たちに、頼朝は実朝の将来の守護を求め、皆腰刀を献上して忠誠を誓っている。つまり、実朝は頻繁に忠誠を誓われており、逆に御家人

たちの忠誠が頼家から実朝に移行しているように感じられる。結果的に実朝は頼家の遺児公暁に斬殺されるが、頼家への忠節を奪われた怨念も一因かと思われる。

一条実雅室出産〔三〕、北条義時室出産〔四〕、頼嗣誕生〔五〕には剣の記述がない。時宗誕生〔六〕にも、加持僧、医師、陰陽師の給禄に野剣があるだけで、宗尊親王御息所出産〔七〕でも剣の記載はない。さらに北条時頼室出産〔九、十〕も、驗者、医師、陰陽師に剣の給禄はあるが、誕生への剣の献上はない。

將軍補佐でしかない一条実雅には、剣・護刀献上の必要はない。宗尊親王も女兒誕生のため、剣の献上はないが、頼嗣に剣の献上がないのは不自然である。剣の儀礼は天皇家に限るという、公家の論理による可能性があるが、法の制定が剣の秩序の意義を弱めたとも考えられる。

このほか、禄としての剣にも考察を加えておく。〔十〕では姫君の誕生に銀剣が給禄されているが、儀礼向け飾太刀である銀剣は華やかさを表し、姫君誕生に相応しいものと言える。

一方、野剣は野太刀とも書かれる。兵仗に佩く太刀で、天皇の野外外出の警護に帯用するために「野太刀」と呼ばれた。男児には実用的な野太刀がふさわしいと考えられたのであろう。

これより禄の剣は、誕生の明るい将来を期待するものと考えられる。特に、神仏や僧侶、陰陽師等に贈与することは、神仏への祈願・御礼と解釈でき、忠節の意味は薄いと言える。

誕生儀礼の剣について整理すると、源氏將軍期は臣下が將軍に忠誠

を誓う意味を持っていたが、摂家將軍以降は禄として下賜するものとなり、意味も神仏への祈願とお礼に変容したようである。対象も執権以下に広がり、剣で忠・信を示す秩序は薄れたようである。また、弓の場合と同じように、剣による秩序より法による統制が求められたとも考えられる。

以上のように、刀剣の授受で信頼と忠節の秩序を見てきた。平安時代には天皇家の皇子女に賜剣が行われ、自分の子であることを認知するものであった。但し、読書鳴弦儀とは異なり、摂関家以下の臣下には広まらず、鎌倉時代でも將軍から子へ賜剣は行われなかった。即ち、賜剣儀礼は將軍家には認められず、結果的に信頼の意義を持つ剣による秩序は、誕生儀礼にはほとんどなかったものと捉えられる。室町時代に將軍家で親から子へ賜剣が行われるようになったのは、將軍家の家格が天皇家と並ぶくらいに上昇していたためと思われる。

一方、子から親への剣の献上は、親への忠節を示す行為とされた。その形態は臣下から主君への刀剣の献上に変化し、護刀が將軍家の誕生へ献上された。この儀礼は、摂家將軍以降は途絶えたが、その理由は、鳴弦の場合と同様に、法の秩序の整備が要因と考えられる。

第三章 馬に関する誕生儀礼

第一節 平安時代の公家の、誕生儀礼における神馬の奉納・馬の賜与
敦成親王と禎子内親王の誕生記事には、皇子女誕生の祈願・御祝として寺社に神馬奉納は見られない。但し、道長は寛弘四年（一〇〇七）二月二十九日に春日詣を行った際、走馬十列の後で馬四足の奉献

を行っている²⁵。これは二十歳でも懐妊しない彰子の懐妊を祈願するものである。翌年、敦成親王が誕生し、この祈願は成就したが、まだ誕生前後の祈願・感謝の神馬奉納は慣例となっていない。但し、敦成親王の場合は五十日の儀で、禎子内親王の場合は七夜の産養で馬が給禄されており、誕生に近い時期には馬に関する儀礼があったと言える。

ここで、神馬奉納が始まった時期を確認しておく。朝儀として行われる祭への摂関家による神馬使発遣は、『年中行事秘抄』などに道長の頃に定着していた観があるとされている。ただ、その淵源は藤原忠平の祭への臨時祈願であったと考えられており、藤原氏の大臣に受け継がれるうちに神馬奉納は大臣にとって義務的なものと認識されるようになっていった。

『御堂関白記』での祭への奉幣に関する初見は長保元年（九九九）

二月十一日乙未条で、道長は春日祭奉幣の際に神馬奉納も行っている。また、神馬奉納は道長が奉幣・参詣する全ての祭に対して行われた²⁶。

つまり、神馬奉納は上述の二つの誕生記事より前に始まったが、まだ誕生祈願・御礼のため誕生時前後に行われていなかった。

他には、寛治四年（一〇九〇）に『中右記』著者の藤原宗忠に男子が誕生している。当時の宗忠は従四位上で、「申時男子平産」の他に記載はない。一方、仁安二年（一一六七）十一月六日には九条兼実の元に男児（良通）が誕生している。兼実は正二位右大臣であり、出産時には僧侶・陰陽師・医師が奉仕し、僧侶には馬、医師と陰陽師には布・衣が給禄している²⁷。

また、承安三年（一一七三）九月三日には任子（後の後鳥羽天皇中

宮)が誕生しているが、僧侶への禄が馬ではなく牛であることが男児と違っていた。⁽²⁸⁾

さらに、『平家物語』の安德天皇の誕生時には、平重盛が馬十二疋を引かせたことや、伊勢・叡島ほか七十余か所の神社に神馬を奉納したことが描写されている。⁽²⁹⁾つまり、出産時の神馬奉納が兼実と同時期とされているが、実際には『平家物語』成立時の状況と考えられる。

以上のように、出産時の神馬奉納は鎌倉時代に始まった可能性が高いが、加持・祈禱・治療の奉仕者への馬の給禄は道長の頃まで遡れるようである。

第二節 馬に関する観念

馬は儒教の典籍と関連が薄いが、儒教的観念と同様の考え方で、日本・中国の俗信などの中から関連しそうな観念を検討する。まず、馬は一般的に次のように説明される。

・「神馬」として神社に奉納されたり、競馬により豊凶を占ったりする神聖な動物であると同時に、軍事・交通・農耕などの面にわたって実用的な動物でもある。年中行事にも「白馬の節会」「駒牽き」

「競べ馬」「駒迎え」など馬が登場するものが多くみられる。

そもそも日本では、馬は神の乗物として神聖視され、生きた馬を神に献上する風習が、『常陸国風土記』⁽³⁰⁾や『続日本紀』⁽³¹⁾に見られる。また、神馬は以下のように説明される。

・神の乗用に供する馬の意で、神社に奉納した馬。神に参詣や祈請の時などに献上した馬。祈雨には黒毛、祈晴には赤毛など、目的によ

って毛色が異なった。また、後には絵馬の風習にかわった。神駒。神の乗物とは書かれていないが、早くから奉納されていたことがわかる。その目的は、祈請や祈雨・祈晴のほか、五穀豊穡を願うこと⁽³²⁾、災厄を免れることなどとされていた。

このほか、馬についてはさらに二つの意義を考慮すべきかと思われる。そのうちの一つは、八月の年中行事である駒牽で、服属・臣従を意味するものである。駒牽では、甲斐・美濃・上野・武蔵の四か国の勅使牧から馬が貢上され、内裏で天皇の見ている前で牽き、左右馬寮や諸臣に分配する。駒牽で牧監や別当が牽くのは東国諸国の服属を、貴族・官人が賜った馬を牽くのは臣従を表現するとされる。⁽³³⁾

もう一つは白馬の節会に関するもので、邪気を払う意味があるが、他に序列の意味も考えられる。⁽³⁶⁾白馬の節会はもともと正月七日の叙位儀礼に追加されたものであったが、次第に「白馬と叙位の関係」が強まり、「馬と序列の観念」が形成されたと考えられる。加えて、王権との関係は薄いが、『礼記』曲礼に馬車の乗る際の作法として、御者と乗り手の身分関係で力綱を渡すか否かの記述があり、やはり序列の観念を示している。

以上、馬に関する観念をまとめると、以下のようになる。

- ① 「神馬」として奉納することで、祈請、五穀豊穡ほかの祈願（とそのお礼）をする。
- ② 馬を献上することで、臣従を示す。
- ③ 邪気を払う。
- ④ 序列を示す。

- このうち儒教思想に含まれそうなものは②臣従と④序列であるが、②は直接関連する典拠はなく、日本的な解釈による。これらを踏まえ、①、③にも注意し誕生儀礼を検討する。

第三節 室町時代の武家の、誕生儀礼における神馬の奉納・馬の賜与

馬に関しても詳細な記載のある『御産所日記』の内容を整理する。

まず、男児誕生に際しては、將軍から医師に馬一疋が下賜される。

そして、翌日からの祈禱に対しても、陰陽師に馬一疋が下賜される。

また、加持僧には寺院に馬一疋が送られ、薬師には男児の袍衣納の時に馬一疋が与えられる（女兒の場合は一重）。その後、種々の加持・祈禱にも給禄があるが、重要なものには馬が一疋下賜される。そして、若君誕生に際しては、御産所亭にも將軍・若君から馬一疋が下賜される。諸社への神馬寄進は先例に従う。

さて、ここまで馬の下賜（および寄進）についてまずまとめたが、加持僧・陰陽師や諸社に対するものは神仏への祈願と御礼の意味と言える。医師・薬師に対しては俸禄の意味が強いが、男児の場合に限られることもあり、特殊技能者を通した神仏への加護の期待も想像される。これらより馬の下賜は、祈願・御礼の意味と考えてはば違いないと考えられる。

一方、若君誕生には、大名とその身内が馬と太刀を進上するが、これは臣従の意味が強いと思われる。また、公家・門跡も馬と太刀を進上しており、彼らも將軍家に臣従する立場にあることを示している。ともかく室町時代の馬の進上は、序列よりも臣従の觀念が強いと言え

る。

第四節 『吾妻鏡』に見られる、誕生儀礼における神馬の奉納・馬の賜与

頼家誕生（一）においては、誕生前日に近国の宮社に奉幣使を送っている。また、寿永元年（一一八二）当時に頼朝の勢力下にあった、伊豆、箱根、相模、武蔵、両総、安房、常陸³⁷で、各地の御家人が奉幣使を担っており、頼朝の思い入れの強さが感じられる。

さらに、誕生翌日には頼朝は御家人たちから馬を二百疋余り献上させており、良馬を相模国内諸社に奉納している。鎌倉の鶴岡八幡宮、相模国一宮寒川神社、大庭神館、三浦十二所神社、久里浜住吉神社などである。この場合は邪気を払い、将来の御加護を願うことなどのための神馬奉幣と考えられる。また、馬二百匹というのはかなりの数で、世嗣（頼家）に対する期待の大きさを感じさせるものである。七夜儀における、千葉一族からの武具進上のうち馬の献上は臣従の意思表示と言え、劍の献上とともに忠誠の誓いを強く表現している。

次に、実朝誕生（二）においては、産前に政子が鶴岡八幡宮へ神馬一匹を奉納している。誕生当日にも、相模国神社仏寺に神馬二疋ずつ奉納して誦経を行っている。鶴岡では上下の宮に千葉常秀と三浦景連³⁸が伴い、他の神社は各地の地頭が馬を伴っている。千葉（境）常秀は常胤の孫、三浦（佐原）景連は義澄の甥と、若い世代であることを考えると、将来実朝の臣下として期待されていると考えられる。他の神社も同じと考ええると、実朝に臣従する家臣団の形成が想定され、この場合の神馬献納は臣従の意味が強いと思われるが、古参御家人と若い

世代との序列を示す意図も感じられる。

産後には古参御家人たちが現れてそれぞれの献上物を差し出している。そのうち、大江広元、小山朝政、千葉介常胤は剣とともに馬を献上している。これは加持の圓曉と、驗者の義慶房と行慈に与えられた。この時、八田知重、小野義成、大友能直が馬を引いている。加持驗者への馬の賜与は、神仏への御礼を意味するのであろうが、馬を引いた三人は献上した三人の一〇二世代下に当たり、上下の序列も示していると思われる。また、七夜儀でも同様に、御家人たちが馬と剣を頼朝と実朝に献上している。いずれも臣従を示すものと思われる。

このように、実朝の場合は頼家の場合と比べ、馬の献上は臣従や序列の意味が強まっている。また、両例とも馬給禄の際には、献上者、引役に序列をつけることが慣例化している。

一条実雅室の場合〔三〕は、実雅が臣従される立場でないため神馬奉納も馬給禄もない。

その後、北条義時室の出生、頼嗣誕生、時宗誕生、宗尊親王御息所の出生〔四〕〔七〕、いずれも出生前後に神馬奉納はない。代わりに陰陽師による祈禱が増え、仏像供養が行われている。頼経の鎌倉下向に、多くの僧侶や陰陽師が従ったためと思われる。また、神馬奉納による安産祈願や邪気払いは期待されなくなり、馬の観念としては、臣従や序列が強まったと考えられる。そこで、改めて義時室の場合〔四〕から、禄における馬の扱いを検討する。

義時室の場合〔四〕の給禄馬の引役は、驗者の大進僧都観基には安東左衛門尉光成、医師の丹波頼経と、安倍国道以下六人の陰陽師には

原左衛門尉忠康と大野新右近将監である。加持僧分は中野五郎⁴⁰が宿坊に届けた。四人のうち二人については不詳であるが、安東光成と中野五郎の二人は義時の側近である。つまり馬を引くことが、臣従を表すことを示している。

頼嗣誕生の場合〔五〕は、加持僧、医師、陰陽師に馬の引役までは記されていないが、佐渡前司後藤基綱が奉行している。基綱は頼経の近習番となっているほか、評定衆・恩沢奉行・引付奉行などを歴任し、頼経の子である頼嗣への臣従が期待されていたと考えられる。

北条時宗誕生の場合〔六〕も、驗者、医師、陰陽師への馬の引役はわからない。ただ三浦盛時が喜びのあまり、自分騎用の名馬に銀鞍を置いて陰陽師に与えている。このとき盛時は北条時頼に強く臣従を誓ったと思われる。宝治合戦では時頼に参じているが、若干特異例である。宗尊親王御息所の出生〔七〕の場合には、馬は三人の僧だけに給禄され、馬引役の名もない。誕児が姫宮なので、臣従を求める必要がなかったと思われる。また、『御成敗式目』が制定され、宗尊親王の京都送還前年でもあったので、御家人の臣従が得られなかったとも思われる。

時頼室の宗政出生〔九〕でも、給禄馬の引役の名はない。但し、北条重時から別禄の使いで藤原泰経がいる。泰経は宗尊親王の鎌倉下向時の使者で、時頼に仕えていたと見られる。重時は時頼の二世代上でその連署も務めたので、重時が泰経を使うのは序列的に自然である。

時頼室の女兒出生〔十〕では、安東光成が禄の奉行をしている。光成は義時の側近であったが、そのまま得宗家に仕えたものと思われる。

馬引役から祿の奉行への転身は、序列の上昇を意味する。馬引などの諸役についた万年九郎秀幸^⑫は、もともと北条泰時の御内人で、承久の乱後は鎌倉で保々奉行人に就任しているが、この時期は安東光成より下位にあったと見ることができる。また、北条重時の別祿の使者となつた隅田次郎^⑬は、重時の被官であつた。このように、「九」、「十」からも、馬の観念として序列が強まっていることがわかる。

以上、誕生儀礼における神馬奉納と、馬の給祿について検討した。神馬奉納は頼家や実朝の誕生記事に見られ、祈願・厄除けとともに臣従・序列の秩序も見られた。しかし、誕生前後の神馬奉納は摂家將軍以降になくなり、馬は僧侶、医師、陰陽師への給祿に変わった。その際、馬の献上者と引役の名があげられ、馬の献上は將軍家へ臣従と、引役との間の序列を示したと言える。しかし、法の制定以降は献上者や引役の名が省略され、やはり儒教思想に基づく秩序の弱体化が感じられる。特に献上者名が見えなくなるのは、臣従という王権に近い観念に関連することが一因と考えられ、王権から離れた観念の序列はしばらく存続したと考えられる。

おわりに

鎌倉時代の誕生儀礼について、武具・武芸に関することを『吾妻鏡』から代表的記事を選び、どのような秩序を形成し浸透させようとしていたかを見てきた。武具・武芸に関することを選んだのは、武家社会にとって身近で分かりやすい物事であるからで、特定の思想に含まれる観念の意義づけで、その観念に従つた秩序が無意識に受け入れ

られると想定したからである。

具体的には、弓の鳴弦を通して礼の秩序、剣・刀の献上を通して忠節の秩序、馬の献上・引役を通じて序列の秩序が形成・普及したと考えたのである。それぞれ平安時代と室町時代の例との比較により、意義づけ自体は平安時代以前にさかのぼり、儒教思想に直接の典拠のあるものとなひものがあるが、公家が鎌倉時代の武士が受け入れやすい形態に変質させることにより、当初は秩序の円滑な浸透が図られたことがわかつた。そして、時期に応じて儀礼の形態変化と秩序としての重みが変わるが、室町時代の武家故実につながることも確認できた。但し、社会の安定に伴い、いったん浸透した秩序だけで問題解決が図れない事態も増えてきた。例えば土地問題の解決にも、礼や信頼・忠節などの秩序が有効であつたが、給与する土地がなくなつたときには儒教的秩序は力を失い、『御成敗式目』という法による統制が必要となつた。その結果、儀礼の様式は変化して、誕生儀礼にもはつきりと表れていることがわかつた。即ち、儒教の礼の秩序は、その観念に応じて差はあるがいずれも弱体化したといえる。

こうした変化をもたらした『御成敗式目』の制定は、『吾妻鏡』編纂者にとって最重要題目の一つで、儀礼の変化にも北条氏を顕彰する姿勢が窺うことができた。但し、『吾妻鏡』編纂時期はモンゴル襲来で幕府が混乱し、武士の家々も分裂を始め、法による裁定も限界が見え始め、北条氏による秩序が崩れる前に編纂は終わっている。そのため、宗尊親王の京都送還以後は、礼的秩序がより弱体化するか、逆に法の混乱を補うのか、検討を要する時期と思われる。

実際、室町時代の故実書の整備により礼的秩序が回復していると考
えられ、『吾妻鏡』後の誕生儀礼と社会背景の関係は、整理すべき課
題である。また、誕生儀礼以外の儀礼や、年中行事と秩序の関連も取
り上げて、思想の影響をより明確にする必要がある。今後はこうした
課題に注意し、まずは年中行事についても検討を進めたいと考えてい
る。

〔注〕

- (1) 宮内庁書陵部編纂『皇室制度史料 儀制 誕生』三、一～四頁、吉
川弘文館、二〇〇九年。
- (2) 『御堂関白記』寛弘四年正月六日条。
- (3) 『古事類苑』三七、禮式部五、誕生祝上、吉川弘文会、一九六九年、
所収、『定家朝臣記』、康平五年九月十一日条。
- (4) 『玉葉』仁安二年十一月一日～一二日条。
- (5) 『玉葉』承安三年九月二十五日条。
- (6) 中村義男『王朝の風俗と文学』、五三頁、塙書房、一九七二年。
- (7) 『山槐記』治承二年十一月十二日条。
- (8) 新釈漢文大系二九『礼記』下、射義第四十六、九三一～九四〇頁、
明治書院、一九七九年。
- (9) 大日方克己『古代国家と年中行事』、一六～四八頁、講談社学術文庫、
二〇〇八年。
- (10) 『日本書紀』卷第十四、大泊瀬幼武天皇 雄略天皇。
- (11) 『日本書紀』卷第二十三、息長足日広額天皇 舒明天皇。
- (12) 『群書類従』第二十三輯、武家部、続群書類従完成会、一九八三年、
所収、『御産所日記』。
- (13) 『古事類苑』三七、禮式部五、誕生祝上、吉川弘文会、一九六九年、
所収、『成氏年中行事』。
- (14) 同掲注(12)、三二二頁。

- (15) 小松茂美編『日本絵巻大成』二一、『北野天神縁起』卷八、中央公論
社、一九七八年。
- (16) 『吾妻鏡』文治元年四月十五日条。
- (17) 野口実『武門源氏の血脈』、二〇三～二〇五頁、中央公論新社、二〇
一二年では、師岡重常を河越重頼の兄弟と見ている。これに対し、
五味文彦・本郷和人編『現代語訳吾妻鏡』二、二一六頁、吉川弘文
館、二〇〇八年では、師岡重常が河越重頼の弟であるとの所伝は確
認できていないとする。
- (18) 『吾妻鏡』文治五年七月十九日条。
- (19) 『吾妻鏡』文治元年四月十五日条。
- (20) 『吾妻鏡』九二頁。文治五年七月十九日条。
- (21) 『吾妻鏡』建久六年三月十日条。
- (22) 新訂増補国史大系、二〇、『栄花物語』卷第廿四、わかばえ。
- (23) 服藤早苗『王朝社会の出生とジェンダー』橋本紀子・逸見勝亮編
『ジェンダーと教育の歴史』一二～一四頁、川島書店、二〇〇二年。

- 御剣賜与の意義が「信任」、「委任」ということにあるとすれば、皇
子と皇女で対等でないことは自然なことのよう受け取れる。また、
記録が見つからないながらも貴族層への御剣賜与の浸透を推察して
いるが、同じ意義を考慮すれば王朝期に一般貴族には簡単に認めら
れないものと思われ、寧ろ藤原長家の例が自然だと考えられる。
- (24) 同掲注(23)、一四～一五頁。
- (25) 『御堂関白記』寛弘四年二月廿九日条。
- (26) 三橋正『平安時代の信仰と宗教儀礼』七七～七九頁、続群書類従完
成会刊、二〇〇〇年。
- (27) 『玉葉』仁安二年十一月六日～十二日条。
- (28) 『玉葉』承安三年九月廿三日～廿九日条。
- (29) 『平家物語』卷第三。御産の事の巻。
- (30) 武田祐吉編『風土記』、六五頁、岩波文庫、二〇一〇年。
- (31) 『続日本紀』天平宝字七年(七六三)五月廿八日条。
- (32) 同掲注(9)、八二頁。

- (33) 阿部猛・義江明子・曾根貴志編『平安時代儀式年中行事事典』二九頁、東京堂出版、二〇〇三年。
- (34) 同掲注(33)、一四九〜一五一頁。
- (35) 山中裕『平安朝の年中行事』一三七〜一三八頁、塙書房、一九九一年。
- (36) 山中裕「平安朝における年中行事」有精堂編集部『平安貴族の生活』五九頁、有精堂出版、一九八五年。山中は、「―中略―『小野宮年中行事』に青馬の叙述がないのは、この頃はまだ、あるいは七日節会の叙位が主であって青馬は従であつたのかもしれない。」としている。
- (37) 土肥遠平、佐野基綱、葛西清重、小栗重成、安西景益は、頼朝の挙兵時ころから従って信を得ている。常陸の小栗重成は詳細不明だが、頼朝と志田義弘の衝突の際、頼朝方に加わったようである。
- (38) 関幸彦、野口実編『吾妻鏡必携』、一八二頁、一六二頁、吉川弘文館、二〇〇八年。
- (39) 同掲注(38)、一七九頁、一一〇頁、一七一頁。
- (40) 五味文彦・本郷和人編『現代語訳吾妻鏡』九、一八八頁、吉川弘文館、二〇一〇年。
- (41) 永原慶二監修、貴志正造訳注『全譯吾妻鏡』五、一四四頁、新人物往来社、一九七七年。
- (42) 五味文彦・本郷和人編『現代語訳吾妻鏡』八、一八五頁、吉川弘文館、二〇一〇年。
- (43) 鎌倉期に北条氏の被官となつた隅田党の一人と考えられる。

(い)ふく いはちろう 文学研究科日本史学専攻修士課程修了)

(指導教員：今堀 太逸 教授)

二〇一三年九月二十四日受理